

話しことばにおける受身の研究

— 日本語母語話者と韓国人非母語話者の日本語使用場面を中心に —

指導 J.V. ネウストプニー 教授

国際学研究科環太平洋地域文化専攻 19842202 高 民 定

論 文 目 次

第1章 本研究の枠組み	1
第1節 研究目的と方法	1
1.1 研究目的	1
1.2 研究方法	2
第2節 論文構成と各章の概要	2
第2章 受身の文法的研究	5
第1節 日本語の受身	5
1.1 受身文の文法的条件をめぐって	5
1.2 受身文の場面的条件をめぐって	8
第2節 韓国語の受身の研究	13
2.1 韓国語の受身の典型	13
2.2 対応する能動文がない非典型的な受身	15
2.3 疑似受動	16
2.4 韓国語の「되다[toyta], 받다[patta], 당하다[tanghata] 아/어지다[a/e cita] の受動性表現	17
2.4.1 「되다 [toyta], 받다[patta], 당하다[tanghata]」	17
2.4.2 -아/어지다[a/ e cita] による受動性表現	18
第3章 本稿における談話データと調査概要	20
第1節 本稿における談話分析	20
1.1 「談話」と「談話の研究」	21
1.2 調査概要	21
1.3 調査期間と手順	26
1.3.1 調査期間	26
1.3.2 調査の手順	26
第2節 データ分析に関する記述	27
2.1 分析の対象となる受身の使用をめぐって—正用と逸脱—	27
2.2 談話における発話の表記方法	28
2.3 第4章の受身の機能の分析における記述	29
2.4 第5章の受身の言語管理の分析における記述	30
2.5 文字化の要領	30
2.5.1 文字化の記号	31
2.5.2 発話の表記方法	31
第4章 日本語の談話に見られる受身の機能	32
第1節 問題の諸相	33
1.1 行為者以外の要素(行為対象)の「前面化」の機能	34
1.2 行為者の背景化の機能	37
1.3 視点による機能	40
1.4 談話構造の役割と受身	42
1.5 間接的な迷惑の気持ちを表す機能	45

1. 6	受身の発話機能	46
1. 7	その他の受身の機能や慣用化された受身	47
第 2 節	談話分析	50
2. 1	談話に見られた受身の使用数	50
2. 2	談話データに見られる受身の機能	51
2. 2. 1	[会話 1] に見られる受身の機能分析	51
2. 2. 2	[会話 2] に見られる受身の機能分析	53
2. 2. 3	[会話 3] に見られる受身の機能分析	56
2. 2. 4	[会話 4] に見られる受身の機能分析	58
2. 2. 5	[会話 5] に見られる受身の機能分析	59
2. 2. 6	[会話 6] に見られる受身の機能分析	60
2. 2. 7	[会話 7] に見られる受身の機能分析	61
2. 2. 8	[会話 8] に見られる受身の機能分析	62
2. 2. 9	[会話 9] に見られる受身の機能分析	63
2. 2. 10	[会話 10] に見られる受身の機能分析	66
2. 2. 11	[会話 11] に見られる受身の機能分析	71
2. 2. 12	[会話 12] に見られる受身の機能分析	73
2. 2. 13	[会話 13] に見られる受身の機能分析	76
2. 2. 14	[会話 14] に見られる受身の機能分析	78
2. 2. 15	[会話 15] に見られる受身の機能分析	79
2. 2. 16	[会話 16] に見られる受身の機能分析	82
2. 2. 17	[会話 17] に見られる受身の機能分析	83
2. 2. 18	[会話 18] に見られる受身の機能分析	86
2. 2. 19	[会話 19] に見られる受身の機能分析	87
2. 2. 20	[会話 20] に見られる受身の機能分析	88
2. 2. 21	[会話 21] に見られる受身の機能分析	91
2. 2. 22	[会話 22] に見られる受身の機能分析	94
2. 2. 23	[会話 23] に見られる受身の機能分析	97
2. 2. 24	[会話 24] に見られる受身の機能分析	98
2. 2. 25	[会話 25] に見られる受身の機能分析	102
2. 2. 26	[会話 26] に見られる受身の機能分析	103
2. 2. 27	[会話 27] に見られる受身の機能分析	105
2. 2. 28	[会話 28] に見られる受身の機能分析	106
第 3 節	分析の結果と考察	108
3. 1	談話における受身の機能	108
3. 1. 1	複数の機能による受身の生成	108
3. 1. 2	行為者の前面化（受動効果）と受身の生成	110
3. 1. 3	行為者の背景化機能と受身の生成	112
3. 1. 4	視点による機能のバリエーションと受身の生成	114
3. 1. 5	談話構造の役割と受身の生成	116
3. 1. 6	間接的な迷惑の気持ちを表す機能による受身の生成	118
3. 1. 7	発話機能と受身の生成	119
3. 1. 8	その他の受身の機能と受身の生成	120
3. 2	各機能間の関係	122
3. 3	参加者別の受身の機能	126
3. 3. 1	非母語話者に見られる受身の機能	126
3. 3. 2	母語話者に見られる受身の機能	128
第 5 章	受身の言語管理	130

第1節	言語管理理論	130
1.1	言語管理理論の背景と目的	130
1.2	管理プロセス	132
第2節	受身の言語管理の分析	136
2.1	「管理モデル」適用のあらし	136
2.2	接触場面と母語場面の各会話場面に見られる受身の使用と言語管理	137
2.2.1	NS(1)×NNS (1)の接触場面における言語管理	137
2.2.2	NS(2)×NNS (2)の接触場面における言語管理	140
2.2.3	NS(3)×NNS (3)の接触場面における言語管理	141
2.2.4	NS(4)×NNS (4)の接触場面における言語管理	142
2.2.5	NS(5)×NNS (5)の接触場面における言語管理	144
2.2.6	NS(6)×NNS (6)の接触場面における言語管理	145
2.2.7	NS(7)×NNS (7)の接触場面における言語管理	147
2.2.8	NS(8)×NNS (8)の接触場面における言語管理	148
2.2.9	NS(9)×NNS (9)の接触場面における言語管理	150
2.2.10	NS(10)×NNS (10)×NNS (11)の接触場面における言語管理	152
2.2.11	NS(12)×NNS (13)×NNS (11)の接触場面における言語管理	153
2.2.12	NS(14)×NNS (12)の接触場面における言語管理	154
2.2.13	NS(15)×NNS (13)の接触場面における言語管理	154
2.2.14	NS(16)×NNS (14)の接触場面における言語管理	156
2.2.15	NS(16)×NNS (14)の接触場面における言語管理	158
2.2.16	NS(17)×NNS (15)の接触場面における言語管理	158
2.2.17	NS(18)×NNS (16)の接触場面における言語管理	160
2.2.18	NS(19)×NNS (20)の母語場面における言語管理	162
2.2.19	NS(21)×NNS (22)の母語場面における言語管理	163
2.2.20	NS(23)×NS(24)×NS(25)の母語場面における言語管理	164
2.2.21	NS(26)×NS(27)の母語場面における言語管理	166
2.2.22	NS(28)×NS(29)×NS(30)の母語場面における言語管理	166
2.2.23	NS(31)の母語場面における言語管理	167
2.2.24	NS(32)の母語場面における言語管理	168
第3節	受身の言語管理の諸相	169
3.1	接触場面における受身の言語管理	169
3.1.1	非母語話による逸脱とその管理	169
3.1.2	接触場面の母語話者による受身の言語管理	184
3.2	母語場面における母語話者の受身の管理	191
3.2.1	母語話者に見られる受身の使用実態	191
3.2.2	まとめ	195
第6章	まとめと結論	197
第1節	まとめと考察の結果	197
1.1	受身の文法的研究	197
1.2	受身の複数の機能	197
1.3	受身の言語管理	200
第2節	受身の統合理論の構築へ向けて	202
参考文献		206
添付資料		

論 文 要 旨

高民定の博士論文は、基本的には、異文化接触場面の話し言葉の受身を対象にしている。このテーマは2つの点で本論文の独自の位置を示している。母語話者場面における受身の研究はこれまでも存在するが、接触場面での調査研究はない。また、書き言葉での受身の使用が研究対象になるのが常であるが、話し言葉での受身が的になることは現在までは実際上はなかった。つまり、本論文は、新たな分野を開拓するパイオニア的な研究成果をあげたところに特徴があると言えよう。さらに、本論文は、受身の研究に以下のような新しい観点を加えている。

1. 受身の研究は単に結果としての現象を「説明」するのではなく、具体的な場面においてその産出を可能にすることが必要であること。
2. 受身の純文法的な研究をふまえた上でさらに受身の性質と使用を明らかにするためには、従来の文法論の方法には限界があること。
3. 受身の使用を説明するために、受身の「機能」に注意を払い、その数を増やし、体系的に説明すべきであるということ。
4. 受身使用の過程において問題がおこると、使用者がそれを「管理」しているということ。
5. したがって、受身の新しい総合的理論が必要であるということ。
6. このために、談話データを集め、種々の新しい方法論を駆使していること。

これらの諸観点は、接触場面での受身だけではなく、また話し言葉の受身だけでもなく、すべての受身の研究にとって問題提起として価値があると思われる。

基本的なデータは、接触場面の会話である。このデータは、体系的に分析され、さらにフォローアップ・インタビューによって支えられている。

論文の中では受身の文法的な取り扱いの考察の後に、「機能」の細かい分析が続く。高民定は「前面化」、「背景化」、「視点」、「主観的な判断や気持ちを表す」などの機能を、データの一つ一つの例文から分析していく。つまり、「きれいな例」だけではなく、データにおけるすべての談話の詳細な分析である。ここで、しばしば、一つの機能ではなく、複数の機能がかかわり、協力したり、衝突したりして、相互に作用するのである。このような記述は、新しい「生成文法」に導く可能性がある。